

- <<http://techwave.jp/archives/51738716.html>>
 (37) <<http://pinterest.com/>>
 「合衆国2012年のインターネット状況: Pinterestが前年比4000%成長, ecはAmazonのほぼ独壇場」Techcrunch <<http://jp.techcrunch.com/archives/20120614comscore-us-internet-report-yoy-pinterest-up-4000-amazon-up-30-android-top-smartphone-more/>>
 (38) <<http://readyfor.jp/>>
 (39) <<http://camp-fire.jp/>>
 (40) <<http://faavo.jp/>>
 (41) <<http://www.social-lunch.jp/>>
 (42) <<http://coffeemeeting.jp/>>

アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献 した人々 (1)⁽¹⁾ ～アン・キャロル・ムア ①～

金山愛子

はじめに

子ども達に本当によい本は手渡されているのだろうか。書籍の出版は年々減少しているとは言え、児童書だけでも日本では年間4000点以上の新刊書が出版され、推定発行部数は2000万冊を超える。⁽²⁾次から次へと新しい本が出版されるなかで、子ども達にどのような本を手渡したらよいか書店で途方にくれるという声が少なくない。数ある本の中で何を選ぶか、そのしるべが必要なのである。そのようなしるべはこれまでも作られてきたし、今も作られているが、なかなか一般の人々の手に届かないのが難点である。

本稿ではよい本を子ども達に手渡すために働いた人々に注目する。世界的に著名なヨーロッパ文学史家であるポール・アザール(Paul Hazard)は彼の児童文学論の中で、アメリカの負の部分認めながらも、「アメリカは、よそ目にも感心するほど子どもを大切にす。若い国アメリカは、児童教育に若々しい、不断の情熱を傾けている。子どもを守り、その精神を養い、とびきり上等の糧を与えて、その好奇心を満たしてやるために、なんという感嘆すべき努力を払っていることだろう！」と讃嘆の言葉を惜しまない。⁽³⁾さらに子どものための本の質、量の充実に注目し、アメリカ人は「美しいものを愛する気持ちばかりでなく、美しいものに親しむ習慣を若いころからつけようと努めている」とし、「子どものための図書館こそが、アメリカの創案にかかるものであり、アメリカ国民の人情の深さを知らしめる発案なのである」と述べる。⁽⁴⁾世界で初めて公共図書館内に児童部門を設けたのは19世紀末のアメリカにおいてである。瀬田貞二も、「アメリカでいちばん尊敬に値する仕事のひとつは、児童図書館の組織とその活動だと思います」と述べている。⁽⁵⁾

現代の日本と同じように、数多くの児童書が出版される1900年代前半のアメリカで、子ども達に本を読む楽しみを経験させたい、できるだけよい本を子ども達と出会わせたいとの理想を持って、児童図書館の発展に尽力した人々がいた。子ども時代の読書の大切さと児童図書館の設置を広く

訴えたキャロライン・ヒューインズ(Caroline Hewins)、ストーリーテリングの魅力をアメリカに伝えたマリー・シェドロック(Marie Shedlock)、児童図書館の充実と図書館員養成に貢献したアン・キャロル・ムア(Anne Carroll Moore)やアリス・ジョーダン(Alice Jordan)、児童書の書評雑誌を創刊したバーサ・マホーニー・ミラー(Berth Mahony Miller)、子どもの本のすぐれた作家や画家を育てた編集者のメイ・マッシー(May Masee)、トロントの児童図書館員で『児童文学論』を著したりリアン・スミス(Lillian Smith)などである。このような人々を紹介していきたいと考えているが、本稿でははじめに、子どもを大人とは別個の存在として考え、子ども向けに出版された『コンプトンズ・エンサイクロペディア』(Compton's Pictured Encyclopedia)の中で、図書館、子どもの文学がどのように捉えられていたかを検証する。同時に、ニューヨーク公共図書館の児童図書室の礎を築いた責任者であり児童書の批評家として同時代の人だけでなく後世にも大きな影響を残したアン・キャロル・ムア(Anne Carroll Moore, 1871-1961)を数回に分けて取り上げ、彼女がどのような理想や指針をもって子どもの本を選んでいったのかを探っていききたい。なぜならムアは50年以上前に活躍した人でありながら、彼女の影響は現在に至るまで及んでいる。その一例として、今春イギリスではJan Pinborough著*Miss Moore Thought Otherwise: How Anne Carroll Moore Created Libraries for Children*というようなムアをとりあげた本がハウトン・ミフリン・ハーコート社から出版される。

子ども達への尊敬と信頼をもって子どもの本を作り、手渡してきた人々の歩みをたどることで、子ども達に贈る本選びに途方にくれる大人だけでなく、子どもと本をつなぐ立場にある大人、そして親達にとっての指針が示されることを期待する。

1. 子ども向けの百科事典

『コンプトンズ・エンサイクロペディア』(Compton's Pictured Encyclopedia)は1922年から発行された子ども向け百科事典であり、日本では瀬田貞二がこの百科事典についていち早く紹介している。瀬田は国会図書館でアメリカの児童百科事典を見ていたときに、北欧の大作家がブルックリン児童図書館を訪れて、「これは夢だ。夢の実現だ。私は世界じゅうにここに比する楽しい場所を知らない」と手放しで讃嘆した言葉が引用してあったのを読んだと紹介している。⁽⁶⁾ 瀬田は、後に平凡社から出た『児童百科事典』の構想を練っていた1949年ごろに『コンプトンズ・エンサイクロペディア』

ア』のムアのブックリストを見て、「ぼくは息をのむほど驚いたんですね。あ、これほど充実した子どもの本があるのか、一冊一冊読んでみたいもんだと思いました」と後にインタビューに答えている。⁽⁷⁾ 1922年の時点でも、世には多くの本が出版されており、よい本と悪い本を見分けるには、時の審査を経てよい本として受け継がれてきた良書をまず読むこと、それによって判断する目が養われるというのが、子どもの本に対するこの百科事典の基本姿勢である。センダックもヴァージニア・ハヴィランドとの対話の中で次々に出版される本のすべてに印刷される価値があるのかと疑問を呈し、マーガレット・ワイズ・ブラウンやルース・クラウスなどの素晴らしい本を山ほど持っているのだから、出版を一年か二年やめて、古い本を子ども達に手渡したらどうかと言っている。⁽⁸⁾ これは冗談交じりの発言だとしても、同意する人は少なくないであろう。

はじめに、『コンプトンズ・エンサイクロペディア』がどのような目的をもって発行されたのか、そして子どもの文学について、子どもに本を手渡す図書館の役割についてどのように考えているのかを、実際に見てみよう。編集長のミネソタ大学大学院教授ガイ・スタントン・フォード博士の言葉によれば、「知識の全領域を網羅した研究をアルファベット順に並べ、学問的な完成度と正確さを犠牲にすることなく、新鮮に生き生きと魅力的に表現し、さらに豊かな挿絵によって、物語として読めるような百科事典」を目指したのである。⁽⁹⁾ この目標は美しい言葉でこの百科事典のどの巻のうち扉にも記されている。

大志を抱かせること、想像力を刺激すること、問いかける心に正しい情報を興味を持たせるようなやり方で伝えること。こうしてもっと広い知識の地平へと導くこと。それが、この事典の目的です。

初版の「図書館」の項目では、まずはじめに、学校が終わるとすぐにニューヨーク公共図書館の貸し出しカウンターの前から通りにまで伸びる子ども達の列が言及されている。⁽¹⁰⁾ その子どもの数は1500人にも上るといふ。そのあとで、本の貸し出し方法、世界の図書館の歴史が紹介される。アメリカは図書館の数が最も多く、効率よく管理された図書館の数々を誇っている。また蔵書の中には点字の本や、移民のための外国語の本もあり、アメリカの公共図書館は公立学校について「もっとも教育的なアメリカ化する力」を有するとしている。

「子どもの文学」の項目には「不思議の国への光輝く扉」との見出しが

ついており、本を選ぶのは友達を選ぶようなものであるとしている。⁽¹¹⁾ここでは、文学のジャンルを「マザーグース」のような耳にくすぐったい、おばあさんがしてくれるような話、詩や歌の本、動物寓話、妖精やゴブリンの物語、神々の話、英雄物語に分けて紹介している。ジャンル分けのこの基本は、より体系的にリリアン・スミス⁽¹²⁾やポール・アザールに継承されている。この項目での重要な主張は、少年少女のためにたくさんの本—よい本もわるい本も—が出版されている時代にどのようにしてよい本を選んでいくかである。よい本を選ぶには、年上の人からのアドバイスと自分で判断する方法があるが、「わるい本を見極めるには、まずよいと証明された本をよく知ること。そうすれば判断できるようになる」。大人に対しては、子ども達は本物の思想や知識や知性を求めているのであって、わるい本は子ども達を本当の意味で喜ばせることはできないと明言している。偉大な文学作品を読めるようになるために、まずは子どもでも楽しめるようなやさしいよい本を読むことから始めることが必要だとして、年月を経て読み継がれてきたことでよい本であると証明された100冊の本のリストを挙げている。

『コンプトンズ・エンサイクロペディア』発行の基盤には、第一次世界大戦後の好景気の波によって書籍をふくむモノが大量に生産される時代にあって、よい影響もわるい影響も受けやすい子どもたちに、どれだけよいもの、真実なものを伝えていけるかという大人の側の使命感とはっきりとしたビジョンがあったことが窺われる。この使命感は年々強まっていったと思われる。大恐慌を経た1934年版の『コンプトンズ』では、うち扉に「文学」と記した文章があり、この事典の理想を高らかに謳っている。

子ども時代、世界はすべて新しい。心の扉がぱっと開けられると、その入口には好奇心という名の笑みを浮かべた給仕の男が立っている。彼は通りすがりの事実と空想すべてに手招きして、祝宴へと招き入れる。そこでは想像力という名のあの気高き主人が席についているのだ。ここではどんな事実も鮮やかな色の衣装をまとい、どんな空想も自由に歩き回れる。

考えや理想が形造られるのは、その時なのだ。しかし好奇心が呼び入れるとき、誰か中に案内する人がいなければならない。そうでなければ真実と一緒に偽りが入り込んでしまうかもしれない。案内する人がいなければ、混乱と無秩序が想像力の食卓を支配することになってしまうだろう。母や父や学校が、学びという架空の冒険における案内

人だ。そしてその最良の助け手となるのが、よい本である。案内人としてこの事典を手にとってほしい。そのような役割を果たすために、これは捧げられたのだから。⁽¹³⁾

1934年版になると、石版に書かれた文献の収集から図書館が始まったことなど、以前よりも詳しい図書館の歴史の説明があり、公共図書館についての紹介が充実してくる。公共図書館は老若男女を問わずに開かれているとし、アメリカ公共図書館の発展の中で、児童図書館の誕生を注目すべき出来事として位置づけている。そのあとで図書館の利用法が説明される。「図書館のきまり」という見出しでは、子ども達に公共の財産を借りるという意識を植え付けようとしている。この1934年版にはムアによる家庭の子どもの本棚のためにそろえる本選びの手引となる「七段の子どもの本棚をつくる」(“Seven Stories High: The Child’s Own Library”)が選書リストと共に掲載されている。⁽¹⁴⁾

「子どもの文学」の項目はさらに充実し、世界で最初の絵本、ヨハン・コメニウスの『オルビス・ピクツス (絵で見る世界)』(*Orbis Pictus*, 1675)から始まり、18世紀イギリスの出版者ジョン・ニューベリーの出した本が紹介されている。ニューベリーが『靴ふたつさん』(*The History of Goody Two-Shoes*, 1765)を金箔をつけた花模様のオランダ製の紙で装丁したことまでが紹介されている。児童書出版の先がけとなるこの出版者の子どもたちへの愛情が感じられるエピソードである。この本の著者であると目されているオリバー・ゴールドスミスは、ニューベリーを「博愛主義の出版者」と呼んだ。この『靴ふたつさん』をリリアン・スミスは「直接子どものために書かれ、今も生きながらえている、イギリス最初の本」として位置づけ、ささやかながら「説明しがたい魅力をそなえていて、その魅力が長の年月、おとなと子どもの心をひいてきたのである」と説明している。⁽¹⁵⁾さらに彼女は、チャールズ・ラムが『靴ふたつさん』がほとんど絶版になってしまったことを嘆いてコールリッジにあてた手紙を紹介している。⁽¹⁶⁾この項目では、フェアリー・テール、昔話、詩、古典の再話などのジャンルの紹介とともに、ジョン・ロックやルソーなどの教育哲学も紹介されている。さらに、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙(*New York Herald Tribune*)内の書評欄や、『セント・ニコラス』(*St. Nicholas*)、『ブックマン』(*The Bookman*)、『ホーンブック・マガジン』(*The Horn Book Magazine*)などの児童書専門の雑誌が創刊されたため、アメリカ国内の文学批評における子どもの文学の位置が保証されたことも言及されている。

1948年版で特筆すべきは、「図書館」の項目の公共図書館、児童図書館、学校図書館に関する記事の充実であろう。児童図書館の欄には、「アメリカの偉業」と見出しをつけ、1911年にニューヨーク公共図書館が現在の場所に開館した折に訪れたデンマークの著名な作家の言葉を引用している。

アメリカで見た他のすべてのことに関して、私は心の準備ができていました。しかしこの児童図書館は驚きです。これを見て私は驚きと喜びを感じます。児童図書館は本当の意味で民主的です。私は子ども達と交じてこの美しい部屋でただ本を読んで長い時間を過ごしたいと思います。それはもう一度子どもになることを意味します。新しい自由をもった子どもです。仲間に入れてもらえるでしょうか？⁽¹⁷⁾

このニューヨーク公共図書館児童部門の主任が、アン・キャロル・ムアという強い意志と本物を見極める明晰な洞察力と批評力、子どもに対する心からの共感を持ち、柔軟な工夫に富んだたくいまれな女性であった。

2. アン・キャロル・ムアの思想と働き

アン・キャロル・ムアは、1871年メイン州リメリックの弁護士でメイン州議会上院議長も務めた父ルーサーと母サラの十番目の子どもとして生まれた。二人の姉が生まれていたが夭折していたため、七人の兄をもつ末子であった。ルーサーが五十歳の時の娘であり、この父娘の関係はほとんどお互いを崇拝する域に達していたらしい。⁽¹⁸⁾ 1892年、両親をインフルエンザであいついで亡くしたムアは、その後の三年間兄の家族と住み、兄嫁が亡くなった後は家事と残された姪たちの世話をすることになる。やがてアン自身のキャリア構築のチャンスが訪れ、1895年ニューヨークはブルックリンのプラット研究所の図書館学校(The Library School of Pratt Free Institute)に入学する。プラット研究所は1887年に開学した、大学に行けない若者を対象としたテクニカル・スクールとしての位置づけだった。ムアは当時、子どもを対象とした図書館の仕事には大した興味を抱かず、むしろ研究とレファレンスの仕事にひきつけられていった。⁽¹⁹⁾ しかし卒業後、プラット研究所で始まったばかりの児童図書館の事業に招かれ、1896年から1906年までの10年間、そこで児童図書館の発展のために指揮をとった。仕事を始めた当初の新鮮な喜びを、ムアは級友たちに宛てた1897年2月の手紙で次のように書いている。

私たちの新しい図書館は昨年6月に開いたばかりです。ここ、私のいる大きな部屋には天気の良い日には明るい陽の光があふれるように注ぎこみ、曇りの日には、子ども達でいっぱいになります。私は人生でもっとも満ち足りた日々を生きているように感じます。⁽²⁰⁾

この図書館創設の責任者であったメアリー・ライト・プラマー(Mary Wright Plummer)は、新しい図書館に二つの特徴を持たせることを考えた。一つは子どものための図書館として初めから設計することであり、もう一つは、一般市民に対して美術資料館としての役割を持つことであった。「子ども」と「本」と「絵」はムアの中ですぐにつながったという。しかし自身の実体験や姪達との関わり程度にしか子どもについて知識のなかった彼女は、ここで猛烈に勉強した。⁽²¹⁾

子どもを飽きさせないための活動も考えた。単調さは子どもの好奇心を壊すとして、展示品の入れ替えを頻繁に行ったり、季節や祝日に合わせて展示をしたり、ブックリストを作成したりした。ムアの展示はどんどん拡大していき、たとえば日本の芸術作品の展示や、米西戦争(1898)の最中には「ヒロイズム」をテーマとして展示を行った。⁽²²⁾

児童図書館が地域に根づく、ムアは地域の学校を訪問し、先生や生徒の役に立つ方法を考えた。学校訪問は校長の礼儀正しくうちとけない学校案内で終わることが多く、「制度」の中に入り込むことのむずかしさを感じた。しかしある学校訪問の折に見た光景から、ムアはストーリーテリングを子ども達と本をつなぐ術とすることを考えだした。⁽²³⁾ 子どもに本の楽しさを知ってもらうために、声に出して読んだり、子どもに本の話をする時間である。1900年代初期には今日的なストーリーテリングは存在しなかった。当時流行していた過度に芝居じみた読み方や感傷的な読み方をムアは嫌った。ムア自身はストーリーテリングをしなかったらしいが、語り手を招いておはなしの時間を持った。おはなしの時間をどう評価するかについてムアは次のように述べている。

お話が完璧に語られたかどうかではなくて、それが子どもの心の中で何かつながりを作りだすような仕方語られたかどうかです。そのつながりは永遠に彼らの心の中に宿るでしょう。⁽²⁴⁾

このような流れのなかで作家や詩人を実際に招くこともあったし、⁽²⁵⁾ こ

の時期イギリスからやって来た語り手マリー・シェドロックとの出会いと友情の始まりもあった。⁽²⁶⁾

またムアは、本や絵本の中で見るものが「実体を帯びる」ようにするために花や他の自然物を飾ることもあった。⁽²⁷⁾ 見たことも聞いたこともないものを、言葉だけを手がかりに想像することはむずかしい。たとえ同じ体験でなくとも、読み手の中に蓄積された経験とのかすかなつながりから、類推し、想像することができれば、どんな遠い世界の物語であっても、言葉は実体をもって裏うちされ、子どもは充分にその世界を感じることができるのである。これはリメリックで父と一緒に「うちとけた沈黙」の中で、美しい景色を見るためにだけわざわざ回り道をして帰るような、そんな親子の経験が背景にあるのかもしれない。⁽²⁸⁾ そのような体験をとおして父が子に何かを教え込もうとしたのではなかったとムアは述懐している。⁽²⁹⁾ しかし、幼い心は多くを吸収していったのだ。

小説で起きることのほとんどは私が育った村でも起こっていた。そこにはロマンスもミステリーもあれば、美も恐怖もあった。そこには臆病者も嘘つきも泥棒も不貞をはたらく者もいれば、偉業を遂げた人物的に立派な男女もいた。私は十五歳になる前に、私がその中で一つの役を演じている人間のドラマを、この眼で見、この耳で聞き、私自身の強い感情を覚えながら感じていたのだ。⁽³⁰⁾

ムアは同時に、図書館の会員になることは、市民としての最初の独立した行為であるとして、本を借りるということは、公共の財産を借りるということであることを子ども達に教えようとした。そこで子どもと図書館との間で交わす誓約を子ども達に求めた。⁽³¹⁾ 『コンプトンズ』の1948年版に記された「(アメリカの児童図書館は) 本当の意味で民主的だ」と驚嘆したデンマーク人のあの喜びに満ちた驚きは、このような子ども達への市民教育なしには獲得できなかった評価であろう。

もう一つムアがプラット時代に手掛けたことに、選書リストの作成がある。『児童図書館のための推薦図書リスト』(*A List of Books Recommended for a Children's Library*, 1902)は、1902年と1905年にアイオワ図書館委員会の委託でサマースクールで教えた折に作られた21ページほどのパンフレットである。⁽³²⁾ ムアが書いた走り書きに「選ぶことは創ること—むかしのペルシャのことわざ」というものがあった。⁽³³⁾ しるべとなる図書リストを作成するときだけでなく、図書館員は好みも家庭環境も人種までも違う子

も達にも良書を手渡すために、厳しい基準をもって数多くの本を読み、その中から本を選んでいくわけである。実際に本作りに関わることがなかったとしても、自分の価値観や基準に基づいて本を選ぶことが一つの世界を創ることであり、選ぶ時点でその本を読むことになる子どもの新しい世界を創造することが始まっていると言っても過言ではあるまい。ムアはこの後もっと大きな選書リストを作成することになるが、家庭や学校や図書館だけでなく、出版社にも大きな影響を与えることになった。

ムアは1906年にニューヨーク公共図書館児童部門の主任として招聘される。「ニューヨーク公共図書館は、1906年当時の図書館界の荒野でした」とは、就任当初の思い出を語ったムアの言葉である。⁽³⁴⁾ 彼女は自分のオフィスのあるムーレンバーグ分館だけでなく、市内にある36の分館もまとめていかなければならなかった。この分館をすべて見て回って、所蔵図書の質の悪さ、選書における方針の欠如に気がついたムアは、中央図書館だけでなく、分館でも持ち回りで月一回のミーティングを開くことにする。そこでムアはどの本を選ぶかではなく、さまざまな分野の本を選ぶにあたっての基準を示していった。すなわちどのように本を選ぶかである。選ぶのは個々の図書館員である。このようにして、彼女は選書の基準を示しつつ、図書館員の責任を求めていった。⁽³⁵⁾ プラットの卒業生でムアのもとで働いたジュリア・カーター(Julia Carter)は、ムアの教えを「四つの尊敬」として覚えている。「子ども達への尊敬」「本への尊敬」「同僚への尊敬」「児童図書館員という専門職への尊敬」の四つである。⁽³⁶⁾ 図書館員の教育者としての才能を発揮したムアのもとには、アメリカ全国やカナダから数多くの図書館員が短期間の研修に訪れ、ムアの図書館に対する思いや哲学が各地に広まっていった。後年ムアは図書館員養成学校で教えることになる。

ムアから何かを学びとっていったのは、図書館員だけではなかった。編集者として後に有名になったマーガレット・マクエルダリー(Margaret McElderry)は、出版界に入る前にニューヨーク公共図書館児童部門のムアのもとで働いたのだが、大変興味深い記録を残している。⁽³⁷⁾ ムアのオフィス105号室には子どもの本に関するありとあらゆる人々が訪れた。訪れた編集者たちは、出版社で児童部門を設立した人々だった。その顔ぶれをみると、子どもの本の出版に関わっているすべての出版社からの代表がムアのもとを訪れたのではないかと思われる。たとえば、ヴァイキング社のメイ・マッシー、マクミラン社のルイズ・シーマン・ベッチェル(Louise Seaman Bechtel)、その後を継いだドリス・パター(Doris

Patee)。後にリップニコット社と合併したストークス社のヘレン・ディーン・フィッシュ(Helen Dean Fish)、ロングマン社のバーサ・ガンターマン(Bertha Gunterman)、ダブルデイ社のペギー・レッサー(Peggy Lesser)、スクリプナー社のアリス・ダルグリーシュ(Alice Dalgliesh)、ハーバー社のルイーズ・レイモンド(Louise Raymond)やアーシュラ・ノーストロム(Ursula Nordstrom)、ハーコート社のエリザベス・ハミルトン(Elizabeth Hamilton)、オクスフォード出版のユニス・ブレイク(Eunice Blake)、トマス・Y. クローウェル社のエリザベス・ライリー(Elizabeth Riley)などである。このような編集者達は、才能ある作家や画家からできる限り最良の本を引き出して子ども達に届けるために、文や挿絵だけでなく、紙質から製本に至るまで本の質を高めるために戦ったとマクエルダリーは言う。また子どもの文学出版の強みは、そのリーダー達の安定性と継続性にあったとしている。⁽³⁸⁾このような編集者がムアからインスピレーションを受け、自分達によって立つ方針を確認していったことであろう。彼女らは作家や画家を支援して、『おおきなもちいさないえ』のローラ・インガルス・ワイルダーや『げんきなマドレーヌ』のルドウィヒ・ベームルマンズや『ちいさいおうち』のヴァージニア・リー・バートンなどの優れた作家を世に出していったのである。このようにして1930年代の大恐慌の時代でも今に伝わる良書が出版されていった。

石井桃子はアメリカ横断をしたときの旅行記に、児童図書館の草創期に貢献した様々な図書館員や編集者との出会いを記している。彼女がサンフランシスコからニューヨークへ向かう途上で訪ねた図書館ではどこでも、石井の行き先がニューヨークだと知ると、図書館員たちは「じゃ、ミス・ムーアに会えますね！」とにこにこ顔で言ったとある。⁽³⁹⁾ムアの影響を受けた図書館員は全米に広がって仕事をしていたことになる。

3. 子ども達によい本を手渡すために

このような編集者の一人で『ホーンブック・マガジン』の創刊者、バーサ・マホーニー・ミラーは、大恐慌の後遺症からすっかり抜け出すことのできない停滞した1930年代のアメリカで、唯一本当の価値観が見つかる場所は子どもの本の中であると言う。⁽⁴⁰⁾ミラーはこの現象を説明するために、三つの理由をあげている。⁽⁴¹⁾一つ目はアメリカ建国の精神となりゆきである。よりよい自由な暮らしを求めて抑圧を逃れてやってきた多様な文化的背景をもつ人々の国アメリカならでは、豊かで多様な作品が生まれていった。二つ目が公共図書館内の児童部門の存在である。図書館員はよ

い本を要求し、本の批評に関して声をあげていった。三つ目がルイーズ・シーマンやメイ・マッシーのようなすぐれた編集者の存在である。イギリスのケイト・グリーンナウエー、ランドルフ・コールデコット、ウォルター・クレーンとレズリー・ブルック、アメリカのハワード・パイルをのぞいて1919年までは絵本など珍しかった時代に、内容と装丁の完璧な一致にまで繊細な心配りを怠らず、作家と画家を支援していったのが編集者だった。ミラーは、マッシーの本には「いつでもどんなところでもよい生き方を決める」価値観がある。人種や民族性は違っても、成熟した大人と子ども達の姿とそれによって立つ価値観がマッシーの手がけた作品には鮮明に見えてくる、とミラーは賛辞を惜しまない。⁽⁴²⁾現代の子どもの本の編集者の中でどれだけの人がここまで考えて本を出しているだろうか。

児童文学批評と子どもの本に関わる人々への教育という面での働きは、ムアの作成した図書リストに集約される。1932年版の『コンプトンズ・エンサイクロペディア』から「図書館」の項目にムアの「七段の子どもの本棚をつくる」(“Seven Stories High: The Child’s Own Library”)と題するエッセイが選書リストと共に掲載された。⁽⁴³⁾“Seven Stories”というのはもちろん、建物の「階」と「物語」とをかけた言葉遊びであるが、子どもの本を選ぶ際のポイントや工夫を七つに分けて伝えている。作家の誕生日に合わせてその作家の本を子どもに贈るという提案などは、ムア自身が作家の誕生日に合わせて図書館内の展示や企画を工夫した経験に基づく提案であろう。このエッセイ全体には、子どもへの深い信頼と尊敬が感じられる。他方、親は子どもを育てるという一大事業への心構えを問われてくるように感じるほど要求度が高い。また児童図書館や学校図書館に求められる質の高さへの要求も読み取れる。大人達の責任は大きいのである。選書リストは、子どもの成長の段階に合わせて、3歳まで、3歳から5歳まで、5歳から7歳まで、7歳から9歳まで、9歳から11歳まで、11歳から13歳まで、13歳以上の七つの年齢層に分けて、選書している。3歳以下の幼い子どもには耳に快い音のひびきや面白いひびきを大切にしたものを中心に、昔話やABC絵本、『はなをくんくん』や『ペレのあたらしいふく』など、子どもにとってすんなりと入れる世界を描いた絵本を推薦している。ただし、これを3歳以下の子どもに読んであげるのかと思われる本もないわけではない。3歳から5歳になるとABC絵本や昔話の他に、同じぐらいの年齢の子どもが主人公になった絵本で、子ども達が少し自分の日常から足を踏み出せるようになっていく。年齢が進むと異国の物語やファンタジーが増えてくる。さらに年上の子どもには、神話や小説の他に、アメ

リカ国内の地域性がわかるような本や伝記が薦められている。これらのリストを見ると、子どもの心と身体形成にともなってしっかりとした土台作りをしていくことの重要性が感じられる。本稿の最後にムアのエッセイ全文訳を掲載した。ムアが選んだ図書リストは紙幅の関係で掲載できないため、次号に回したい。このようなリストの他にもムアの書評は続けられ、雑誌や新聞内での本の紹介欄が後に『子ども時代への道』(*Roads to Childhood, New Roads to Childhood, Cross Roads to Childhood*)シリーズや『三羽のフクロウ』(*The Three Owls*)シリーズにまとめられた。

現代の日本でも東京子ども図書館の『私たちの選んだ子どもの本』に代表される推薦図書リストが出版されている。このようなしるべが幼稚園や保育園、家庭や本を売る人々へと届いていくようにする工夫を考えなければならない。

おわりに

ムアが学校訪問のときに感じたように、音楽と違って子どもに本を手渡すには工夫がいるのだろう。本を読むことは単に受身の行為ではなく、能動的な行為であり、訓練が必要である。その訓練の過程がそれ自体やさしく楽しいものになるためには大人の側の工夫が欠かせない。ストーリーテリングや読み聞かせは、子どもと本をつなぐ中心的な活動となるであろう。

さらに自然物を図書館内に置いたりして、まず最初に自然そのものにふれることが本を読むよりも先に来るべきであるというムアの説が、今の時代には不可欠な思想であると思われる。どんなに素晴らしい書き手であっても、そのよりどころとなる体験をもたない子どもに想像の翼を広げさせるのは難しい。サリバン先生が少女ヘレン・ケラーの手を水に触れさせてからその手に“water”と書いたように、核となる身体をとおした体験なしでは、子どもは物語についていくことがむずかしくなる。それほど豊かでなかった時代、子ども達はいやおうなしに家の手伝いをして、外で遊ぶことが多かった。だから体験と本の中の言葉は結びつきやすく、自分の体験と同じでなくても容易に類推したり想像したりすることができた。現代日本の、自然から遠ざけられて生活する子ども達になかなか物語が届きにくい理由の一つに、この辺の事情が考えられるのではないだろうか。

また空間ということも考えさせられる。ニューヨーク公共図書館にしてもボストン公共図書館にしても大都会の街中にありながら、その建物に入ると落ち着いた静謐さが支配している。このような建物に初めて足を踏み

入れ、会員となった子ども達の心の中にどんな感情が湧きあがっていたのだろうか。おさない心の中で畏敬の念と喜びが渦巻いていたのではないだろうか。大理石の古典的な建物でなくてもよい。温かい感じのする木の家でもレンガの建物でもよい。子ども達がそこで尊敬と信頼をもって迎えられていると感じられるような、楽しめる場所が家庭文庫や私立図書館という形で日本にもある。理想をもって本と子どもをつなごうとしている人々が、ムア達のようなネットワークの強さや広さには及ばなくても、今以上につながっていくことを願いたい。本を手渡すことはまさに、次世代を担う人々を育てることである。

本稿ではアメリカ児童図書館の黎明期の中心にいたアン・キャロル・ムアの仕事を紹介したが、次号ではムアの推薦する図書を詳細に見ていくことで、ムアの子どもの本の批評について考察していきたい。

参考文献

- Compton's Pictured Encyclopedia*, Vol. 1, F. E. Compton & Company, Chicago, 1922
Compton's Pictured Encyclopedia, Vol. 4, F. E. Compton & Company, Chicago, 1922
Compton's Pictured Encyclopedia, Vol. 8, F. E. Compton & Company, Chicago, 1934
Compton's Pictured Encyclopedia and Fact-Index, Vol. 8, F. E. Compton & Company, Chicago, 1948
 Eddy, Jacalyn, *Bookwomen Creating an Empire in Children's Book Publishing 1919-1939*, The University of Wisconsin Press, 2006
 McElderry, Margaret K., "The Best of Times, the Worst of Times: Children's Book Publishing, 1924-1974," *The Horn Book Magazine*, Vol. L, October 1974, Number 5, The Horn Book, Incorporated, Boston
 Miller, Bertha Mahony, "Children's Books in America Today," *The Horn Book*, Vol. XII, July-August, 1936, Number 4, The Horn Book, Incorporated, Boston
 Moore, Annie Carroll, *Roads to Childhood*, George H. Doran Company, New York, 1920
 Moore, Anne Carroll, written and edited, *Three Owls*, Macmillan Company, New York, 1925
 Sayers, Frances Clarke, *Anne Carroll Moore*, Hamish Hamilton, London, 1972
 アザール、ポール『本・子ども・大人』矢崎源九郎、横山正矢共訳、紀伊国屋書店、1957 / 1990
 石井桃子『石井桃子集6 児童文学の旅』岩波書店、1999、2008
 奥山博子「年表：講座 子どもと子どもの本のためにーリリアン・スミス『児童文学論』に学ぶー(講師 真壁伍郎)」(非売品)、2012
 オルダースン、ブライアン『6ペンスの唄をうたおう』吉田新一訳、日本エディタースクール出版部、1999

斎藤惇夫『子どもと子どもの本に捧げた生涯—講演録 瀬田貞二先生について—』キッズメイト、2002

瀬田貞二『瀬田貞二 子どもの本評論集 児童文学論(上)』福音館書店、2009

瀬田貞二『瀬田貞二 子どもの本評論集 児童文学論(下)』福音館書店、2009

センダック、モーリス『センダックの絵本論』脇明子・島多代訳、岩波書店、1990 / 2009

全国出版協会・出版科学研究所『出版指標年報2011年版』全国出版協会・出版科学研究所、2011

スミス、リリアン H.『児童文学論』石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳、岩波書店、1964 / 1991

東京子ども図書館編『私たちの選んだ子どもの本』東京子ども図書館、1991 / 2012

にいがたグリム『ほん・子ども・本』若木エージェンシー、1984

にいがたグリム『ほん・子ども・本2』若木エージェンシー、1986

松井直『松井直がすすめる50の絵本』教文館、2008 / 2009

松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』日本エディタースクール出版部、1987 / 2007

- (1) この論文を執筆するにあたり、新潟大学名誉教授の真壁伍郎先生には多くの資料をご教示いただき、ご指導いただいた。またムアのブックリストの日本語訳を調べるにあたり、元新潟市立図書館館長の若佐久美子さんに大変お世話になった。実際に子ども達と家庭文庫で関わっておられるにいがたグリムの会の皆さんからは、ムアのエッセイに関して多くのことを明らかにしていただいた。この場を借りて御礼申し上げます。
- (2) 『出版指標年報2011年版』全国出版協会・出版科学研究所、2011、p. 132、p. 141。
- (3) ポール・アザール、矢崎源九郎・横山正矢共訳『本・子ども・大人』紀伊国屋書店、1957 / 1990、p. 128。
- (4) 同上、pp. 129-130。
- (5) 瀬田貞二『瀬田貞二子どもの本評論集 児童文学論(上)』福音館書店、2009、p. 59。
- (6) 同上、p. 60。ただし、この北欧の作家の言葉については出典は明らかでない。
- (7) 瀬田貞二『瀬田貞二子どもの本評論集 児童文学論(下)』福音館書店、2009、p. 12。吉田新一氏とのインタビューの中で言及している。
- (8) モーリス・センダック、脇明子・島多代訳『センダックの絵本論』岩波書店、1990 / 2009、pp. 188-189。
- (9) *Compton's Pictured Encyclopedia*, Vol. 1, F. E. Compton & Company, 1922, p. xii.
- (10) *Compton's Pictured Encyclopedia*, Vol. 4, F. E. Compton & Company, 1922, pp. 1991-1993.
- (11) 同上、pp. 2027-2030。
- (12) リリアン H. スミス、石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳『児童文学論』岩波書店、1964 / 1991。ジャンル別の解説はpp. 58-345。
- (13) *Compton's Pictured Encyclopedia*, Vol. 8, F. E. Compton & Company, 1934.
- (14) 実際には1932年に初めて掲載されたい。Frances Clarke Sayers, *Anne Carroll*

Moore, Hamish Hamilton, 1972, p. 87.

- (15) スミス、前掲書、pp. 24-25。
- (16) 同上、p. 27。
- (17) *Compton's Pictured Encyclopedia*, Vol. 8, 1948, p. 106f. 瀬田貞二はこの言葉を紹介している。
- (18) Sayers, p. 9.
- (19) 同上、p. 57。
- (20) 1897年2月23日の手紙。同上、p. 61。
- (21) 同上、pp. 62-63。
- (22) Sayers, pp. 70-71.
- (23) 同上、pp. 74-77。
- (24) 同上、p. 80。
- (25) Jacalyn Eddy, *Bookwomen: Creating an Empire in Children's Book Publishing 1919-1939*, The University of Wisconsin Press, 2006, p. 36.
- (26) Sayers, pp. 80-85.
- (27) 同上、p. 70。
- (28) Annie Carroll Moore, *Roads to Childhood*, George H. Doran Company, 1920, p. 15.
- (29) 同上、pp. 15-17。
- (30) Sayers, p. 32.
- (31) 同上、p. 68。
- (32) 同上、p. 85。
- (33) 同上、p. 86。
- (34) 同上、p. 119。
- (35) 同上、pp. 121-125。
- (36) 同上、pp. 127-128。
- (37) Margaret McElderry, "The Best of Times, The Worst of Times: Children's Book Publishing, 1924-1974," *The Horn Book Magazine*, Vol. L, October 1974, Number 5, pp. 85-86.
- (38) 1935年までは全員女性だったとマクエルダリーは付け加えている。
- (39) 石井桃子『石井桃子集6 児童文学の旅』岩波書店、1991 / 2008、p. 19。
- (40) Bertha Mahony Miller, "Children's Books in America Today," *The Horn Book Magazine*, Vol. XII, July-August 1936, Number 4, p. 199.
- (41) 同上、pp. 199-202。
- (42) 同上、pp. 202-204。
- (43) 本稿の資料として添付した記事の出典は、*Compton's Pictured Encyclopedia and Fact-Index*, Vol. 8, 1948, pp. 107-121。1932年版から始めたことに関してはSayers, p. 87を参照。末尾に資料として「七段の子どもの本棚をつくる」と題したムアのエッセイの翻訳を掲載した。次号でこのエッセイに続くブックリストを掲載する予定であるが、このリストの一部は斎藤惇夫『子どもと子どもの本に捧げた生涯—講演録 瀬田貞二先生について—』キッズメイト、2002に掲載されている。

七段の子どもの本棚をつくる⁽ⁱ⁾

アン・キャロル・ムア

子どもは自分だけの本をもって育てていくべきです。世界を広げ、子ども時代の自然な興味を育てるために、思慮深く選ばれた本は贅沢などではありません。身体に適切な食べ物が必要なように、精神的および霊的な成長にとって、そのような本は欠かせないものです。どの家計でもこのような本の購入のための予算を用意しておくことが必要ですし、母親同様、父親も家庭での子どもの本棚を始めることに責任をもつべきです。そうすることで親たちは、次の世代の子どもたちにとって、世界とはどのようなものになるのかを考え直してみる機会に恵まれるのですから。

親たちにとって、子どもの本の中で芸術、文学、科学、そして人類の歴史の始まりがどう描かれているかを調べるほど大きな実りをもたらすものはありません。最良の子どもの本は、子ども達に純然たる喜びを与えるために、その作者―作家であろうと画家であろうと―が意匠をこらした芸術作品なのです。この崇高な目的を達成したものはごくわずかであることに加えて、このような作品を深く味わえる時期もとても短いために、この稿に付けたブックリストでは、七歳以下の子どものための本に特別な注意を払っています。どんなテーマが好きかは子どもによって違います。それでも、よい絵と明瞭な物語にたえず触れることで、あらゆる形の芸術について、よいものと悪いものを見分ける眼が養われるかもしれません。

たとえばランドルフ・コールデコット⁽ⁱⁱ⁾の絵本では、幼い子どもの絵本の中でもとりわけ生き生きとした犬や馬、おんどりやめんどり、豚や牛の絵にお目にかかれます。もっと年上の子ども達には、彼の作品は十八世紀英国のユニークな絵物語となり得ます。コールデコットは線画の巨匠であり、実物を生き生きとほがらかに描く才能を持っていました。アーサー・ラッカム⁽ⁱⁱⁱ⁾はこのように述べています。「コールデコットが表現したことは、ディケンズやヴィクトル・ユゴーが書いたことと同じくらい重要であるように私には思える。『生まれながらの人情』^(iv)というものを彼は持っていた。彼の戯れの中に意地の悪いところはない。」

子ども時代にコールデコットの絵本を知った人にとって、彼の絵本は決して忘れ得ぬものになるでしょうし、年を経て興味を失うこともないでしょう。したがって、『農家の若者』(*The Farmer's Boy*)は、おそらく子ども

の本棚の礎石となるでしょうし、彼の他の本をペーパーバックでそろえるのもよいでしょう。子どもが大きくなって、英国の社会史や挿絵芸術とコールデコットの関係性が分かるようになったら、ハードカバーのもっと長持ちする版に代えてもよいでしょう。アメリカの漫画家リチャード・アウトコルト^(v)が、コールデコットの描いた『狂った犬の死に捧げる唄』(*The Mad Dog*)からインスピレーションを得て、バスター・ブラウンの犬タイジ(Tige)を描いたということを知ったなら、男の子たちは面白がるでしょう。アウトコルトは、コールデコットの絵本は他のどんなものよりも長く残るだろうと考えていました。アウトコルトが残念がったことはたくさんありましたが、中でもコールデコットが「マザー・グース」全部に挿絵を描かなかったことをもっとも惜しみました。『棒馬にのってバンベリ・クロスへ』(*Ride a Cock Horse*)を見れば、コールデコットならどんなにうまくやれたかがわかるでしょう。

「マザー・グース」の挿絵を描いた画家はたくさんいます。しかしコールデコットほど秀逸に、いつの時代にも通用する絵を描いた人は他にいません。『ベイビーズ・オペラ』(*The Baby's Opera*)でウォルター・クレーン^(vi)は、ごく初期の巨匠による音楽つきの古いライム(韻を踏んだ歌)の挿絵を手掛けました。このユニークな挿絵つき歌の本と、ブーテ・ド・モンヴェル^(vii)による挿絵つきの伝統的なフランス古唄集の『懐かしいフランス童謡集』(*Vieilles Chansons*)は、子どもの本棚を作っていくにあたって、理想的な音楽と多大な影響を残した芸術家へのよき案内となります。イギリス湖水地方を背景に動物達のありのままの暮らしを描いたものに、ピアトリクス・ポターの「ピーター・ラビット」とその他の小さな本があります。子ども時代や庭園、子どもの流儀についての感性を見事に描いたのが、ケイト・グリーンナウエー^(viii)の『マリーゴールド・ガーデン』(*The Marigold Garden*)や『Aアップルパイ』(*A Apple Pie*)でした。ケイト・グリーンナウエーはランドルフ・コールデコットの友人で、誕生日が二人とも春先の一週間の間にあります。このような芸術家たちの誕生日に関連づけて本を贈ったなら、子どもたちの楽しみとなり、また記憶に残ることでしょう。

うれしい本のプレゼントを

あるお祝いの折に子どもの本棚へ本を贈ることが、多くの家庭で伝統となっています。それはうれしいお客を迎え入れるという喜びをもたらすはずですし、もしもその本がその時の子どもの趣味に合ったものであることをはっきりと意識して選ばれたものであれば、必ずや喜びをもたらすで

しょう。週ごと、月ごと、年ごとに、子どもには新しい好みが芽生えてくるものですから、親たちが子どもの読書への興味を分かち合う機会を逃してしまってもったいないことです。このような仕方では、どの子どもも自分自身で再発見することになる二つの世界—想像の世界と外の大きな世界—に繰り広げられた生活に本を関連づけることはできないのです。

今日子どもたちが生きている世界は、一世代のうちに大きく変わってしまいました。しかし子ども時代そのものの基本的な性質はそのまま変わらずにあります。まず第一に、子どもは本に純粋な楽しみを要求します。子どもは本来、自分の周りで起きていることがらに強い関心を抱くものですが、その関心をただ一冊の本の中のできごとに移すことは、たちまち芸術というビタミンではなく、すぐにお腹のふくれる食料を与えることと同じになってしまいます。もしも世界に重要な意味があるとするなら、想像力が育っていけるような食べ物—よい絵、美しい音楽、悪意のないノンセンス、抒情詩、ふしぎな物語、忘れがたい言葉で語られた英雄物語—が与えられなければなりません。

幼い子どもにとっても、この広い世界は大きすぎたり遠すぎて、どのようになっているか不思議に思ったり、探索したりできないというものではありません。そのようなわけで、大きな世界地図を子どもの本棚のために最初におくといえましょう。子どもは時間や距離の問題に挫かれることがないので、スウェーデンでペレの家を探したり、ハンガリーまでミキについて行くのも面白いと思うでしょう。慎重に選ばれた絵本でできた自然な道をたどって、子どもはさまざまな国や暮らしに親しみを持つようになります。そのように親しんでいけば、将来の地理や歴史の勉強の背景全体が分かりやすくなるでしょう。そうであれば、取材した国特有の線画やデザインの特徴という面でも、どんな絵本を選ぶかは非常に重要になります。

絵本の影響

おそらく、ある国の民話や伝説、音楽や演劇、絵画やその国固有の芸術、小説や社会の歴史に表れた価値観は、その国を描いた絵本を読むことで、よりいきいきと示されるようになります。このような考えに基づき、また子どもたちと本との長年の親密なつき合いを基にして、最後にそえたブックリストは作られました。

子どもの人格形成期に、よい線画と色彩画、詩と歌、悪意のないノンセンスと、想像上のものであろうと事実を扱ったものであろうと、本物の散

文に長く親しむことで、世界の歴史と世界の文学への感性と興味は育つものです。

同じ家族で育った子どもでも、読書の好みは他のことと同じように千差万別です。

また同じ年齢の子どもたちでも、家庭が違えば読書のレベルはさまざまです。したがって、何歳の子どもにどんな本を手渡すかは、子ども一人ひとりの読書年齢を十分に考慮に入れて考えるべきです。そしてこれは子どもたちと親しく読書の関心を分け合うことによってしか学びとることができないことなのです。一ページのことであれ、「絵が何を言っているか」ということであれ、子どもと一緒に読むことは、他の何にも増して絆を強めることになります。そして家庭でのこのような体験はどの子にも与えられるべきです。

さらにどの親も、このような機会が子ども時代や文学への理解を豊かにしてくれることを認識しなくてはなりません。読書への愛は、自分のために読むという経験や、同じ本が大好きという人と進んで読書を共有する経験から、まったく自然に生まれるものです。したがって、家庭の本棚のために自分で本を選ぶために必要な判断力は、早い時期から本を選ぶ習慣と、他の人が選んだ本をよく考えることの積み重ねによって養われることになります。

公共図書館の子ども本の部屋は、絵本世代から10代までの子どもたちにとって、もっとも興味を持てる本を探し出すための理想的な場です。次にどんな本を買えばよいか分からなくなったら、親は子どもを連れて公共図書館を訪れるといえましょう。そこでなら、たくさんのヒントが見つかるでしょう。発見の喜びは、読書の主要な喜びの一つです。数ある本の中で自分にとってよい本、あるいは悪い本を知ることが、若い読者にとって大変重要なことです。その子は自分で決めるという果てしない仕事への第一歩を踏み出したことになるのです。

賢く本を選ぶために

上手に選ばれた子どもの本棚の本とつき合ってきた少女なら、単に自分が読みたい、あるいは使いたいと思う本を選んでいただけではありません。自由に選ぶことによって、どのように区別するか、どのように判断するか、どのように許容するか、そしてどのように称賛するかを学んでいるのです。子どもたちは、何を学んでいるかをはっきりと伝えることはできないかもしれません。それでも親が子どものために始めた本棚の蔵書を

増やす資金を任されたなら、子どもたちはどの本を買うべきで、どの本を図書館や学校に頼るべきかを知っていることを、なるほどと思うだけの証拠をあげて示してくるでしょう。図書館や専門書を扱う書店が科学や機械技術、ゲーム、スポーツ分野の最新の本を勧めてくれるだろうとの信頼から、ブックリストにはそのような本をあげていません。

いつ本棚を始めるか

子どもが自分で使えるお金を持つようになった時が、自分の本棚のために自分で本を買い始めてよい時期です。七歳まではたくさん本を買う子はほとんどいません。「七段の本棚」の最初の三段の設計は、子どもとその本に親しく接している親たちがしていくものと思われまます。子どもの手の届く所に本棚を用意しなければなりません。そうすれば、一般の読書家のように、手にずしりとくる本の感触を味わう喜びをその子も味わうことができます。

あまり多くの本はいらない

幼い子どもにたくさん本を与えるのは間違いです。それよりも何度も読みたくなる数少ない本を与える方がよいのです。赤ん坊にけばけばしい本を見境なく贈るのは、でたらめに食べ物を与えるのと同様、許すべきではありません。ある時五歳の子どもが特徴のない絵本の棚を指して、厳しいコメントをしました。「あれは、パパがドラッグ・ストアから買ってくるような本だわ。私の本物の本は私の部屋にあるの。」問題の父親とは言えば、ハワード・パイル⁽⁴³⁾の大ファンで、未だに自分の持ち物の中にハワード・パイルの蔵書を大事に持っていました。彼は、五歳向けの子どもの本と本物の本との違いを考える時間をとりませんでしたし、絵画にしる文学にしる、芸術への関心は、若い頃に触れたものを糧に育つということに全く思い至らなかったのです。

あひるが水を好むように、本や読書が好きになる子もいれば、そうでない子もいます。けれども、きちんと考えて計画をたてて、正しい時期に正しい本が手に届くところに置かれるようにすれば、子どもの多くは読みたいという欲求を持つようになります。これをするには親の側に確固とした準備が要ります。親は一般書との関連での児童書の位置づけを知っていなければなりませんし、それらの本に、大きくなるにつれて子どもがどう反応するかについても知っていなければなりません。参考にできる子どもの読書に関するリストや記事がたくさんあります。子どもとの途切れること

のないつき合いや、子どもからの信頼を得たいと願う親なら、このような資料にあたる時間を確保するでしょうし、子ども自身が興味をもって引き継ぎ、年ごとに大きくしていけるような本棚の計画を時間をとって練ることでしょう。

本棚をつくるよろこび

適切な機会さえ与えられれば、子どもは自分自身の本をもつことに相当な興味を示すものです。子どもは自分自身の本棚をつくるのが好きです。本棚の上で自分の本を分けたり整理したり、数を数えたり種類を調べたりするのが好きです。さらに、子どもたちは時に素晴らしい本の批評家であり、年上の読者も彼らから多くを学ぶことができます。

このような直観的批評力は、思慮深く本を選んで購入したり、年ごとに本棚から無用な本を片づけるという経験がある程度することによって強められます。十一歳から十三歳の知的な男の子ほどすばやく、科学の本や歴史の情報が不正確になったり時代遅れになったりしたことを指摘できる人はいないでしょう。このような子どもは、管理の行きとどいた学校図書館や公共図書館で本を調べることに慣れているのです。彼が信頼できる情報を掲載していると知っている本を買うことは許されて然るべきです。やみくもに選んだ本や、お買い得だからという理由で買った本を、このような子どもに与えてはいけません。

最新の情報に基づいた、よい挿絵のついた学校向け、あるいは家庭向けの百科事典は最重要品です。子どもが育ち、趣味も変わっていく家族が、楽しみのために、あるいは情報を得るために本に関心をもちつづけることへの効果を考えると、このようなセットは必需品です。またよい辞書も家庭の本棚には必要です。

子どもの本を単なるおもちゃであるとか商品の一品目としてではなく、本として思慮深く買っていくことで、知識の成長と人格の強さは人生そのものの記録である文学作品から来るとははっきりとわかるようになります。愉快的感覚、美を愛する心、見える世界と見えない世界の両方を思いめぐらす力、見た感じたり知っていたりするものを日常生活のできごとの中で実践していく技術——こういったものはすべて、昔の子どもの本にも現在の子どもの本の中にも見出すことができます。そういった理由で、現在出版されている本の中でこのような質をそなえ、魅力をもったものが、よく知られている古典と並べてブックリストに加えられています。

価値のわかっている良書

このブックリストは、読書を科学というよりも芸術とみなして、たえず進歩していくものとして扱っています。この次に続く段階を考えるにあたって、いわゆる子ども時代の「古典」と言われた本も、かつては新しい本であったということを覚えておかなければなりません。このブックリストの目的は、どの子ども読むべき本をすべて含むということでもありませんし、知識のすべての範囲をカバーするものでもないということを覚えておいてください。その価値はむしろ、すでに試された基本となる本をあげることで、少年少女が建設的にものを考え、表現していけるようになるための案を提示したことにあります。

読書が、スポーツや健全な教育の必須項目の中に場所を与えられてから久しく時がたちました。コンテストにおける高い技能は、恐れを知らない勇気と長い練習の結果であることを親は覚えておくことよいでしょう。

「我々が知識をわがものとするのは、知性を通してというよりは、感受性を通してである。そして若い人が何の努力もなしに、年上の者の目を通して見ることも可能だ」とは、ジェームズ・スティーブンス^(x)の言葉です。正しく選ばれた本との絆を深めながら生活している少年少女というものは、彼らが世界を発見していく過程で、世界と永続的な友情を結んでいるのです。

本を買う際に考えるべき12の質問

これから家庭の本棚のための本を買おうと思っている人は、次の12の質問をしたらよいでしょう。

1. それはあなたが今読むことができ、読みたいと思う本ですか？
2. それは何についての本ですか？
3. 作者は誰ですか？
4. 作者はよい書き手ですか？どうしてそれがわかりますか？
5. 誰がその本の挿絵を描いていますか？
6. 挿絵はあなたに何かを語りかけますか？
7. 印刷の出来はよいですか？
8. 魅力的に製本されていますか？
9. 同じテーマでもっとよい本はありませんか？
10. 同じ本のもっと安い版、あるいは高い版はありますか？どちらを持ちたいと思いますか？その理由は？
11. この本を買うことで、あなたの本棚は今までよりもさらに面白く、また多様になりますか？
12. その本は本当にあなたが自分のものにしたいと思う本ですか？それとも読みすてにしたい本ですか？

- (i) 出典は*Compton's Pictured Encyclopedia and Fact-Index*, Vol. 8, F. E. Compton & Company, 1948. 1932年版からムアのこの記事が掲載されている。原題は"Seven Stories High: The Child's Own Library"（「七階建ての子どもライブラリ」）であるが、ライブラリには「図書館、図書室」のほかに「蔵書」「書庫」の意味がある。日本語に直訳するとあまりにも大がかりなイメージになってしまうので、ブックリストであげられた本数を勘案して「本棚」と訳した。
- (ii) Randolph Caldecott, 1846-86. 英国の挿絵画家。米国ではジョン・ニューベリー賞に次いで、彼を記念してランドルフ・コールデコット賞が設立された。
- (iii) Arthur Rackham, 1867-1939. 英国の挿絵画家。
- (iv) ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』からの引用。
- (v) Richard Outcault, 1863-1928.
- (vi) Walter Crane, 1845-1915. 英国の挿絵画家。
- (vii) Louis-Maurice Boutet de Monvel, 1855-1913. フランスの画家。
- (viii) Kate Greenaway, 1846-1901. 英国の挿絵画家。彼女にちなんで英国でケイト・グリーナウェー賞が設立された。
- (ix) Howard Pyle, 1853-1911. 米国の挿絵画家で、児童向け騎士道と冒険物語の作家。みずからアールヌーヴォースタイルの挿絵をつけた。ここでムアはパイルの作品が子どもの本棚にふさわしくないと断言しているのではない。パイルの作品はブックリストの中でも推薦されている。子どもの年齢に合わせて選ぶことの重要性を述べているのである。
- (x) James Stephens, 1882-1950. アイルランドの詩人、小説家。

(訳・注 金山愛子)